

教科横断型の探究的な学び（グローバル・ヒューマン学）におけるパフォーマンス評価の導入についての考察

—パフォーマンス課題を設定した授業実践の分析を通して—

和田 欣子*・吉本 敏子**・磯部 由香**

Consideration of introducing performance evaluation in cross-disciplinary exploratory learning
(global human studies)

—Through analysis of lesson practice that set performance tasks—

Yoshiko Wada*, Toshiko Yoshimoto** and Yuka Isobe**

要 旨

本研究では、教科横断型の学習を行う、三重県立 Y 高等学校の学校設定科目「グローバル・ヒューマン学」を研究対象とし、パフォーマンス課題を設定した授業実践の分析を通して、パフォーマンス評価の意義や課題を明らかにすることを目的とした。

「グローバル・ヒューマン学」は、グローバルな視点で現代社会の諸課題を科学的な視点から捉えさせ、生命観・倫理感・歴史観・社会性を育むことを狙いとして、「世界史A」、「現代社会」、「家庭基礎」、「保健」を効果的に関連付けて、教科横断型の探究的な学習を行う学校設定科目である。そこで、パフォーマンス課題を設定した授業実践をおこない、ルーブリックを使用して学習者のパフォーマンスを分析し評価した。その結果、9割以上の生徒のパフォーマンス評価の結果が到達すべきレベル以上であったことから、概ね授業目標を達成できたと考えられる。また、ルーブリックを使用して評価することにより、学習者の思考過程や知識を活用する力を読み取れたことから、本研究で行った評価の妥当性は高いと考えられる。さらに、評価結果から、授業設計や指導の改善への方向性が見いだされた。

キーワード：授業分析、パフォーマンス評価、ルーブリック、授業改善

1 研究の背景と目的

中央教育審議会答申（平成 28 年 12 月 21 日）においては、これからの時代に求められる資質・能力を、「何を理解しているか、何ができるか」「理解していること・できることをどう使うか」「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」の3つの柱に整理し、各教科等の学習とともに、教科等横断的な視点に立った学習が必要であり、各教科等における学習の充実はもとより、教科等のつながりを捉えた学習を進める必要があることが提言されている。その答申を受けて、新学習指導要領においては、「カリキュラム・マネジメント」の実現について示され、教科等間の関係性を深めることで、「より教育課程全体としての効果を発揮できる場面はどこか」といった検討・改善を各学校が行うとされた。

三重県立 Y 高等学校は、平成 30 年度にスーパー・サイエンス・ハイスクール（以下 SSH）に指定され、これからの時代を生き抜いていくために必要な資質・能力を系統的に身につけさせることを目的とした「Y 高校版国際科学技術人材育成プログラム」の研究開発に取り組むこととなった。学校設定科目

* 三重大学大学院教育学研究科

** 三重大学教育学部

「グローバル・ヒューマン学」は、1 学年に 2 単位の学校設定科目として開設され、現代社会の諸課題を科学的な視点から捉えさせ、生命観、倫理観、歴史観、社会性を養成することを目的としている。この科目の設定にあたり、「世界史A」「現代社会」「保健」「家庭基礎」の学習を効果的に関連付け、かつ教科横断的に実施する必要があるため、その単位の一部を減ずる研究開発の教育課程の特例を受けている。

本研究においては、教科横断型の探究的な学習を行う「グローバル・ヒューマン学」を研究対象とし、「逆向き設計」論を授業設計のもととなる理論とした。この理論は、ウィギンズ (G.Wiggins) とマクタイ (J.McTighe) (1998/2005) が提唱しているカリキュラム設計論である。「逆向き設計」論では、カリキュラム設計を行う際に、「求められている結果 (目標)」「承認できる証拠 (評価方法)」「学習経験と指導 (授業の進め方)」を三位一体のものとして考えることが提唱されている。教育によって最終的にもたらされる結果から遡って教育を設計することを主張している。「逆向き設計」論自体は、教科のカリキュラム設計のために提案されたものであるが、目標と評価方法を明確にした上で学習経験や指導方法を考えるという発想自体は、カリキュラム設計全体に適応できるとしている (西岡 2016)。この評価方法の一つとしてとして、パフォーマンス課題への取り組みが注目されている。パフォーマンス課題とは、「リアルな状況で、さまざまな知識や技能を統合して使いこなすことを求める課題」を指す (松下 2012)。また、「ある特定の文脈のもとで、さまざまな知識や技能を用いながら行われる、学習者自身の作品や実演 (パフォーマンス) を直接的に評価する方法」をパフォーマンス評価という (松下 2012)。パフォーマンス課題は、「学習者の振る舞いや作品などのパフォーマンスを引き出すために与えられる課題」である。そして、引き出されたパフォーマンスは、ルーブリックという評価基準表に基づいて評価される。パフォーマンス課題への取り組みは、知識や技能の習得に焦点を合わせた授業を乗り越え、知識・技能を総合的に活用する力 (高次の認知能力) に、光を当てるものとなる。

本研究では、教科横断型の探究的な学習を行う「グローバル・ヒューマン学」において、パフォーマンス課題を設定した授業実践を行い、その分析及び評価を通して、パフォーマンス評価の意義や課題を明らかにし、授業設計や指導方法の改善の方向性を見出すことを目的とする。

2. 研究方法

Y 高等学校の SSH の研究開発において、筆者は、共同研究者として、学校設定科目「グローバル・ヒューマン学」の授業の開発に携わっている。Y 高等学校の担当者と共同して授業の設計を行い、授業の観察及び個人が特定されない形でのデータ提供を受けて授業実践の分析及び評価を行った。研究対象とした授業は、平成 30 年 10 月～平成 31 年 1 月に、1 学年 360 名を対象として行ったものである。授業担当者は、Y 高校の「グローバル・ヒューマン学」の担当教諭である。パフォーマンス課題を導入した授業を行い、ルーブリックを用いて学習者のパフォーマンスを評価することにより、授業実践の分析及び評価を行った。さらに、その結果を通して、パフォーマンス評価の意義や課題を明らかにした。

3. パフォーマンス課題を活用した授業実践の概要

(1) パフォーマンス課題の設定

西岡 (2016) は、「パフォーマンス課題」とは、様々な知識やスキルを総合して使いこなすことを求めるような複雑な課題を言い、「原理や一般化」についての「永続的理解」という重点目標に対応させて考案することが有効であるとしている。また、通常一問一答では答えられないような、論争的で探究を触発するような問い (「本質的な問い」) を設定することで、個々の知識やスキルが関連づけられ総合化されて「永続的理解」に至るとしている。

本研究の対象である「グローバル・ヒューマン学」は、「現代社会の諸課題を科学的な視点から捉えさ

せ、生命観、倫理観、歴史観、社会性を育む」ことを目標としており、「どうすればグローバルな視野で現代社会の諸問題を科学的な視点からとらえることができるのか」を探究させていくことをねらいとしている。そこで、パフォーマンス課題は、少子高齢化が一層進むことが予想される日本において、4つの科目（世界史A、現代社会、保健、家庭基礎）の視点から総合的に解決策を考えるという課題に取り組む授業を設計し、「高齢者問題」を取り上げることとした。

「本質的な問い」を、「どうすれば、高齢者の豊かな暮らしを実現することができるのか」とし、「永続的理解」は、「高齢者のための国連原則」（1999）¹⁾をもとに、「高齢者は、人として尊厳を保たなければならない。」（生命観、倫理観、尊厳）、「高齢者は、加齢によって心身の機能が衰えるが、もてる力をいかして社会の一員として自立した生活を送ることができる。」（自立、自己実現、参加）、「高齢者は、心身の状況に応じた支援が必要であり、社会全体で支えられることが必要である。」（ケア）ことへの理解とした。「本質的な問い」に対する「永続的理解」に至るための「パフォーマンス課題」は、リアルな状況で、様々な知識や技能を統合して使いこなすことを求める課題である（松下 2012）（西岡 2016）。本授業では、「パフォーマンス課題」を設定するにあたり、「逆向き設計」論で示されている6つの要素（Goal：パフォーマンスの目的、Role：役割、Audience：誰が相手か、Situation：想定されている状況、Product：生み出す作品、パフォーマンス、Standard and criteria for success：評価の観点）を取り入れて考えることとした。そこで、本授業の「パフォーマンス課題」は、『皆さんには、S高校生の立場でこれからの高齢者福祉のあり方を考えてもらいます。皆さんは、A市民を対象としたR「これからの福祉を考えるフォーラム」での発表者になります（なると仮定します）。G高齢者の豊かな暮らしとは何かを明らかにし、これを実現するためにはどうしたらよいかについて、P具体的な提案を含めた発表を行ってください（考えてください）。S評価はルーブリックを用いて行います。』とした。

（2）授業実践

1学年9クラス360名（平成30年度）を対象として、授業実践を行った。学習活動の概要は表1のとおりである。なお、1時限は65分授業である。

表1 学習活動の概要

<p>各科目（世界史A、現代社会、保健、家庭基礎）における高齢者問題に関連する学習</p> <p>世界史A・・・歴史的背景の学習から見る現代世界の課題</p> <p>現代社会・・・少子高齢社会における社会保障制度、社会生活と法</p> <p>保健・・・現代社会と健康、生涯を通じての健康、社会生活と健康</p> <p>家庭基礎・・・私たちの生活と福祉、高齢社会を生きる</p>
<p>「グローバル・ヒューマン学」の学習活動</p> <p>1時間目・・・高齢社会の現状や課題、高齢者の心身の特徴などを概説し、パフォーマンス課題を作成するためのシナリオを提示する。「高齢者の豊かな暮らし」を考えるには、どのような側面からアプローチしたらよいか班で話し合い、各自の担当分野を決める。DVD視聴（「恋ちゃんはじめての看取り」、「高齢者の生活とサポート」）、高齢者のための国連原則の資料配付。</p> <p>2時間目・・・各自が自分の担当分野について、図書館・情報室を利用して調査する。</p> <p>3時間目・・・各自が自分の担当した分野について調査したことを班内で発表し、次回の班としての提案・意見発表について話し合う。発表資料はホワイトボードにまとめる。（デジカメで記録する）</p> <p>4時間目・・・各班から、発表資料を提示しながら、高齢者の豊かな暮らしの実現に向けて、提案・意見発表を行う。各自が、パフォーマンスの課題に対する提案・意見をまとめる。</p> <p>5時間目・・・学習のまとめ、振り返り</p>

「グローバル・ヒューマン学」での学習の前に、各科目（世界史 A、現代社会、保健、家庭基礎）において、高齢者問題に関する基礎的な知識・理解を深める学習ができるよう計画したが、教科の学習は年間指導計画に基づいて進められており、SSH の研究初年度でもあったため、十分調整して実施することが難しかった。

「逆向き設計」論では『知の構造』を、図 1 の左側のように捉えている。まず、最も低次には「事実的知識」と「個別スキル」が存在している。「事実的知識」と「個別スキル」は、あまり転移しないけれども、身につけておく価値のある内容を示す。「事実的知識」と「個別スキル」がより活用できるまで高まった知識やスキルが「転移可能な概念」と「複雑なプロセス」である。さらに、より高次には、「原理や一般化」に関する「永続的理解」がある。パフォーマンス課題については、このような「原理や一般化」についての「永続的理解」という重点目標に対応させて考案することが有効である（西岡 2016）。そこで、この「知の構造」に表 1 に示した本研究の学習活動を対応させたイメージが図 1 の右側である。

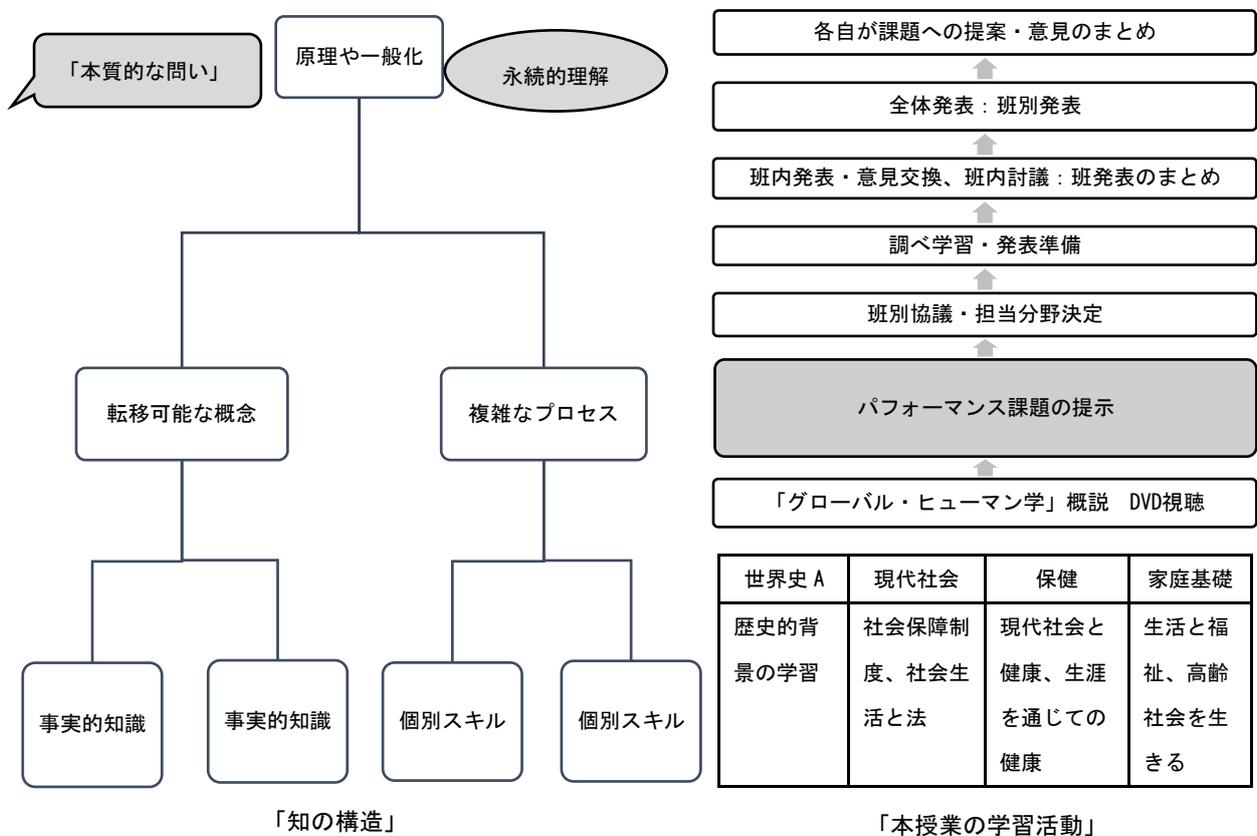


図 1 「知の構造」(西岡 2016)と「本授業の学習活動」との対応イメージ

(3) ルーブリックの作成

パフォーマンス課題を評価するにあたり、ルーブリックを作成した。ルーブリックとは、成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれレベルに対するパフォーマンスの特徴を記した記述語からなる評価基準表である（西岡 2016）。『資質・能力を育てるパフォーマンス評価』（西岡 2016）を参考として、教員 4 人で以下の手順でルーブリックを作成した。

- ① ぱっと見た印象で、「5 すばらしい」「4 良い」「3 合格」「2 もう一步」「1 かなりの努力が必要」という 5 つのレベルで採点する。互いの採点が分からないように、評点を付箋紙に書き、作品の後ろに貼りつける。
- ② 全員が採点し終わったら、付箋紙を作品の表に貼り直し、レベル別に作品群に分ける。

それぞれのレベルに対応する作品群について、どのような特徴がみられるのかを読み取り、話し合いながら記述語を作成する。

- ③ 一通りの記述語ができたなら、評価が分かれた作品について検討し、それらの作品についても的確に評価できるように記述語を練り直す。

教員4人の評価の一致度は最初低かったが、記述語の見直しを重ねることで、評価基準が明確になり、評価の信頼性が高まった。記述語を練り直す中で、生徒の資質・能力をより丁寧に評価することができた。しかし、ルーブリックの作成にはかなりの時間を要し、一時的に評価の作業から離れると、評価の基準のズレが生じやすく、評価の効率化が課題となった。

表2 ルーブリック

レベル	記述語（評価基準）
5 素晴らしい	ア 「高齢者の豊か暮らしとは何か」について記述しており、高齢者についての基本的な考え方を理解している。 イ 論理的に記述しており、論じていることの根拠が的確に明示されている。 ウ 「実現するためにはどうすればよいか」の提言内容が、個人にとどまらず、地域や社会への広がりをもち、独創的な内容である。
4 良い	ア 「高齢者の豊か暮らしとは何か」について記述しており、高齢者についての基本的な考え方を理解している。 イ 論理的に記述してある。 ウ 「実現するためにはどうすればよいか」の提言内容が、個人にとどまらず、地域や社会へ広がっている。
3 合格	ア 「高齢者の豊か暮らしとは何か」について記述しており、高齢者についての基本的な考え方を理解している。 イ 概ね論理的に記述してある。 ウ 「実現するためにはどうすればよいか」の提言内容が、個人のレベルである。
2 もう一歩	ア 「高齢者の豊か暮らしとは何か」が記述してあるが、高齢者についての理解が不十分である。 イ 論理的に記述されていない。 ウ 「実現するためにはどうすればよいか」の提言内容が、不十分である。
1 かなり改善が必要	ア 「高齢者の豊か暮らしとは何か」が記述されていない。 イ 論点が大きくずれている。 ウ 「実現するためにはどうすればよいか」の提言が書かれていない。

ア. 永続的理解（高齢者についての基本的な考え方）、イ. 伝達（論理性、根拠の明示）、ウ. 考察（提言内容）

ルーブリックのレベルについては、多くのレベルを設定すると評価者の認知的負担が増大し、少なすぎると一つのレベルに幅広い作品が混在する問題が生じる。そこで、今回は、レベルを5段階とし、レベル「3」を本授業の目標を達成する段階として設定することにした。

ルーブリックの記述語（評価基準）は、ア.永続的理解（高齢者についての基本的な考え方）、イ.伝達（論理性、根拠の明示）、ウ.考察（提言内容）の3つの要素から構成することとした。学習者が、自身の学習到達度を把握し、より質的に高いレベルとは何かを理解することで、学びの指針として機能させたいと考えた。このため、できるだけ、学習者に分かりやすい表現とすることを心掛け、表2のルーブリックを完成版とした。

更に、「高齢者の豊かな暮らし」の記述内容においてルーブリックの要素A.永続的理解（高齢者についての基本的な考え方）ができているかを読み取るために、「高齢者のための国連原則」を参考に各項目の具体的な記述例（表3）を作成した。

表3 「高齢者の豊かな暮らし」の具体例

項目	内容
自立	<ul style="list-style-type: none"> ・十分な食料、水、住居、衣服、医療へのアクセスを得ることができる。 ・仕事や他の収入手段を得る機会がある。 ・退職時期の決定への参加が可能である。 ・適切な教育や職業訓練に参加する機会が与えられる。 ・安全な環境に住むことができる。
参加	<ul style="list-style-type: none"> ・社会の一員として、自己に直接影響を及ぼすような政策の決定に積極的に参加し、若年世代と自己の経験と知識を分かち合うことができる。 ・自己の趣味と能力に合致したボランティアとして共同体へ奉仕する機会を求めることができる。 ・高齢者の集会や運動を組織することができる。
ケア	<ul style="list-style-type: none"> ・家族及び共同体の介護と保護を享受できる。 ・医療を受ける機会が与えられる。 ・自主性、保護及び介護を発展させるための社会的・法律的サービスへのアクセスを得ることができる。 ・思いやりがあり、かつ、安全な環境で、保護、リハビリテーション、社会的関わりが持てる施設を利用することができる。 ・いかなる場所に住み、あるいはいかなる状態であろうとも、自己の尊厳、信念、要求、プライバシー及び自己の介護と生活の質を決定する権利に対する尊重を含む基本的人権や自由を享受することができる。
自己実現	<ul style="list-style-type: none"> ・自己の可能性を発展させる機会を追及できる。 ・社会の教育的・文化的・精神的・娯楽的資源を利用することができる。
尊厳	<ul style="list-style-type: none"> ・尊厳及び保障を持って、肉体的、精神的虐待のない生活を送ることができる。 ・年齢、性別、人種、民族的背景、障害等に関わらず公平に扱われ、自己の経済的貢献に関わらず尊重される。

注)「高齢者のための国連原則」を参考に作成

4. パフォーマンス評価の結果と考察

(1) パフォーマンス評価の結果

本授業のパフォーマンス課題を導入した学習における評価は図3のとおりである。

評価の全体平均は3.32であり、レベル3（合格）が53.1%、レベル4が38.3%であり、レベル3（合格）以上が92.3%であったことから、学習者は概ね授業の目標を達成できたと考えられる。

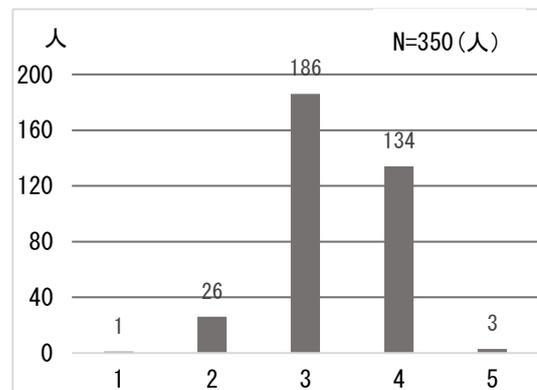


図3 パフォーマンス評価の結果

図6 班発表での「高齢者の豊かな暮らし」の内容

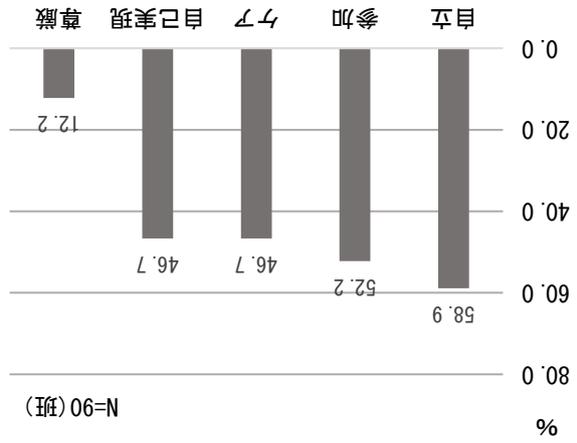


図7 班発表での「高齢者の豊かな暮らし」の記述内容の項目数

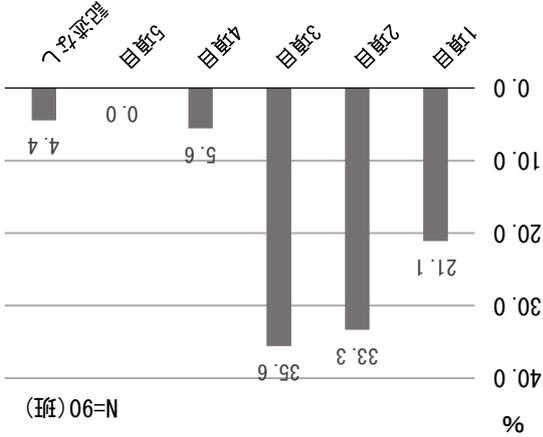


図4 「高齢者の豊かな暮らし」の記述内容

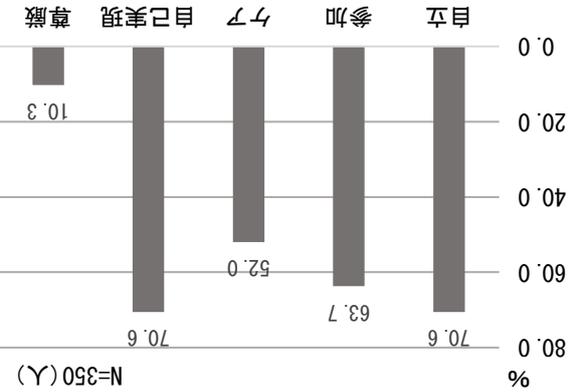
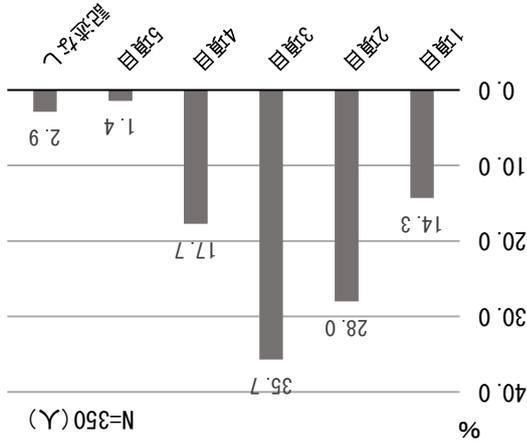


図5 「高齢者の豊かな暮らし」の記述内容の項目数



と考える。

またとめる、という学習活動のなかで、学習者の新たな気づきや思考を深めることができたのではないかと、課題提出時には54.8%となっている。「パワースタッフ課題」の提示 ⇒ 班別協議・担当分野決定 ⇒ 各自が調べ学習・発表準備 ⇒ 班内発表・意見交換 ⇒ 全体発表(班発表) ⇒ 各自が課題を

図6は、班発表時の資料から「高齢者の豊かな暮らし」の内容を5項目で分類したものであり、図7は項目数を記述していたのは35.7%、2項目は28.0%、4項目以上は19.1%であった。

「自立」、「自己実現」の2項目については、70.6%の学習者が記述しており、「参加」については63.7%、「ケア」については52.0%、「尊厳」については10.3%であった。図5は、記述されていた項目数である。

図4である。

「高齢者の豊かな暮らし」について、「自立して生活することができる」、「生きがいをもって生活することができる」、「自分の持てる力を発揮することができる」、「心身ともに健康で、安心して暮らすことができる」などの記述が多くみられた。これらの記述内容を読み取り、表3の5項目に整理したものが

(2) 「高齢者の豊かな暮らしとは何か」の記述内容の分析

パワースタッフ課題に対する学習者から提出された作品の記述内容を詳細に分析した。

(3) 「高齢者の豊かな暮らしを実現するにはどうすればよいか」の記述内容の分析
次に、「提言内容」について、ループリックに基づき記述内容を評価した。

具体的な提言内容から読み取れるものを「個人の努力」「介護制度」「社会制度」「地域の支援」「その他」の5つに分類して表4に主な提言内容をまとめた。

表4 具体的な提言内容(主なもの)

個人の努力	規則正しい生活・適度な運動・バランスの良い食事を心がける、趣味を持つ、若い時からの貯蓄、家事能力を身につける、地域行事やボランティア活動への参加、自分の能力や特技を生かして社会とつながる、若い世代と積極的に交流
介護制度	介護サービスの充実、介護職員の待遇改善、介護保険制度の充実、在宅介護・地域包括支援の充実、介護ロボット等の導入
社会制度	高齢者の雇用の促進、高齢者の特技を地域に還元できる制度、高齢者に配慮した社会環境の整備、年金制度の改善、高齢者に対する福祉制度の充実、物理的、精神的・制度的・情報的・バリアフリーの推進
地域の支援	高齢者の地域での居場所をつくる、地域で高齢者と若者が交流できる場や機会をつくる、高齢者が活躍できる場（地域パトロール隊、子育て支援、社会貢献ボランティア等）をつくる
その他	高齢者の働く場の確保、高齢者に使いやすい商品の開発、ユニバーサルファッション、高齢者のためのコンパクトシティ、高齢者支援のNPO

図8は、提言として記述されていた表4の内容を分類したものを頻度で示したものである。「個人の努力」に関する記述が59.7%で最も多く、次いで、「地域の支援」46.9%、「社会制度」34.0%、「介護制度」16.9%であった。図9は、具体的な提言内容の数である。具体的な提言が1項目というものが45.7%、2項目が37.1%、3項目以上が16.3%であった。

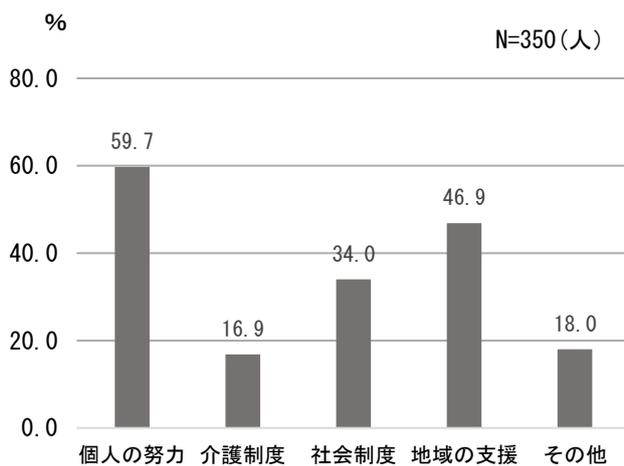


図8 「具体的な提言」の記述内容(複数回答)

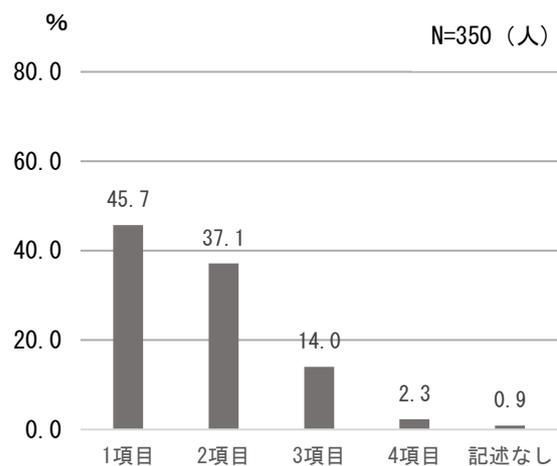


図9 「具体的な提言」の記述内容の項目数

5. まとめ

本研究の結果から以下の知見を得た。

教科横断型の探究的な学び（グローバル・ヒューマン学）におけるパフォーマンス評価の導入について検討した結果、有効性が検証された。成果として把握できたことは2点あげられる。

1 点目は、ルーブリック活用の有効性である。授業の評価の信頼性（評価対象をどの程度安定的に一貫して測られているか（吉原 2010））について、ルーブリックを活用した評価を進める中で、複数の評価者の最初の評価段階の一致度は約 80%であった。記述語の見直しを重ねながら修正し、一致させていく必要があったが、ルーブリックの活用にある程度慣れれば一致度は上がるのが分かった。ルーブリックは、複数の評価者の間で評価基準を共通理解するうえで有効であると考えられる。ルーブリックを使って評価を行うことにより、学習者の思考過程や知識を活用する力をより深くみることができた。また、多くの学習者が新たな気づきを得たり思考を深めたりしていることが分かった。ルーブリックを活用した評価の妥当性（評価対象をどれほどよく測れているか（吉原 2010））はあると考えられる。授業後に、学習者にルーブリックを提示することにより、自身の学習到達度を把握し、より質的に高いレベルとは何かを理解することができた。ルーブリックは、学びの指針として機能させることができると考えられる。

2 点目は、パフォーマンス課題を導入した授業設計の有効性である。パフォーマンス課題を導入した授業を設計することによって、各教科の基礎的な知識・理解やスキルをもとに、現実的な課題解決の最適解を導き出そうとするなかで、既習の知識やスキル、経験などが関連づけられ、総合化されていくのではないかと考えた。授業の分析及び評価結果から、教科横断型の探究的な学びを軸とする「グローバル・ヒューマン学」においては、パフォーマンス課題を導入した授業実践は有効であると考えられる。

パフォーマンス評価として、ルーブリックを 5 段階に設定し、レベル 5 の記述語（評価基準）を設定したが、レベル 5 とした作品がほとんどなかった。このことから、今後の課題について 3 点指摘したい。1 点目は、各教科の基礎的な知識・理解を基に、現代社会の課題に対する解決策を考えるというパフォーマンスの課題に迫るためには、基となる各教科の知識やスキルを関連付け、総合化するということが必要である。この点が十分にできていなかったことがあげられる。各教科の学習と「グローバル・ヒューマン学」の学習を関連づけた授業計画を構想していく必要がある。2 点目は、「独創的な内容」を提言するには、実態や現実の課題を体験的に理解することや、先進的な事例を実地調査するなどのダイナミックな学習活動を採り入れていく事も必要ではないかと考える。3 点目は、パフォーマンス評価の妥当性についてはある程度認められたが、設定した「パフォーマンス課題」及び「ルーブリック」について、学習者の実態なども踏まえて、さらなる検証が必要である。

今後の展望としては、本研究をもとに、「グローバル・ヒューマン学」の全体計画の作成、適切な「パフォーマンス課題」及び「ルーブリック」の妥当性について検討を進めたい。本研究では、学習者からの直接評価や自己評価は行っていないが、自己評価をどのように授業実践に取り入れていくことができるのかについても今後の課題としたい。

謝辞

本研究にあたっては、家政教育講座の増田智恵先生、平島円先生から貴重なご助言をいただきました。共同研究という機会をいただいた関係高等学校の校長先生はじめ教職員の皆様に感謝申し上げます。

注

1) 1999 年 12 月 16 日 国連総会決議・採択

自立(independence)、参加(participation)、ケア(care)、自己実現(self-fulfilment)、尊厳(dignity)

参考文献

- G.ウィギンズ&J.マクタイ著（1998/2005），西岡加名恵訳（2012）『理解をもたらすカリキュラム設計「逆向き設計」の理論と方法』日本標準
- 中央教育審議会答申「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について」文部科学省（2016）
- 西岡加名恵（2017）『「資質・能力」を育てるパフォーマンス評価 アクティブ・ラーニングをどう充実させるか』明治図書出版
- 西岡加名恵編（2016）『教科と総合学習のカリキュラム設計ーパフォーマンス評価をどう活かすかー』図書文化社
- 松下佳代（2007）『パフォーマンス評価ー子どもの思考と表現を評価するー』日本標準
- 吉原崇恵編著（2010）『子どもがいきる家庭科』開隆堂